

---

# エイプリルフール

蒼山

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

エイプリルフール

### 【Zコード】

N1069E

### 【作者名】

蒼山

### 【あらすじ】

バス停で出会った同級生は、その時はもう……。

「あ、小田君……」

「おう、柴崎」

春休み真っ只中の、ある糞ダルい日曜日、何か損した気になる長期休暇中の日曜日のこと。

その日は四月一日、つまりエイプリルフールであった。

誰かに嘘をつく予定など皆無であった。

バス停で偶然にも出会ったのは、中二のときのクラスメイトの柴崎だった。

どちらかといえば目立たない方の女子で、何度かしか喋ったことがなかった。

顔は整っている方だったの、よく告白はされたらしいが。

まあ、本人談ではないが。  
と言つた俺も柴崎のことが中一あたりから結構気になつていたのだが。

まあそんなことはどうでもいい。

「これからどうかいくのか?」

黙つていては気まずいので、俺は喋りかけた。

「え、あ、うん。ちょっと……買い物に」

俯き加減で、柴崎は言った。

「買い物か。俺は特に目的はないんだけどな。ただちょっとブラブラしようかなあと思つて」

「へえ……」

としか柴崎は返さなかつた。

気まずい沈黙だけは避けなければ。

という、なんというかソフトな強迫観念から、俺は喋り続けた。

「お前は何買い物に行くんだ?」

「ええっと……それはちょっと……」

まずつたか？

いや、沈黙よりはマシだろ？……たぶん。  
そういうしていのうちに、バスが来た。

俺と柴崎はそれに乗った。

俺は柴崎に席を譲った。

「ありがとう」

小さくそう言つて、柴崎は座つた。

なんとなく、いつ……優しくしてあげなきゃ一般的な気持ちに近づく

オーラを、柴崎は持つてゐるのだ。

「そういうや、柴崎つて×××高だつけ？」

「うん……そうだよ」

柴崎は言つた。

そして

「たしか、小田君は×××××高だつたよね」

そう続けた。

俺は一瞬、驚いた。

柴崎は会話を展開をせめるようなことはしない。  
今までそんなことはしたことが無かつた。

驚きによる少しの間を置いて、俺は答えた。

「そうだよ。つていうか×××××高つて××中からの奴あんまい  
ないんだよな。友達作りから始めるきやなんねえつてのが、なんつ  
一かダルいなあ」

「……………」

「……………」

妙に気まずい感じの沈黙が、しばらく続いた。

そしてその沈黙を破つたのが

「……………ねえ」

柴崎だつた。

またしても、自發的に会話を展開をせらるようなことをした。

そんな柴崎に何か違和感を感じながらも、取り敢えずは会話を続け

た。

「何だ？」

「小田君つてさ、中学のとき好きな人とかいたの？」

意外なことを訊いてきた。

……まあ、俺は中一のときからお前のことが結構気になつてたんだけどな。

などと眞実を言えるはずもなく、俺は

「いや、別に」

と答えた。

「……ホント？」

「ホントだつて。マジで」

「……まあ、エイプリルフールだから別に嘘でもいいんだけどね……その、ちょっと訊いてみたかったの」

だんだん小さくなる声で、柴崎は言った。

……そうか、今でもう俺は嘘をついたことになるのか。そんなことを思つたときだつた。

「次は、××××××××、××××××××で『りぞこます

バス内にアナウンスが流れた。

「あ、ミスつた」

予定よりも一つ先のバス停まできてしまつたのだ。

「ごめん、俺もう降りないと。一つ先まで来ちゃつたみたいだから

「う、うん。……それじゃ……またね。小田君」

「おう、またな」

俺はバスを降りた。

行く予定だった繁華街まで、歩きで行くことにした。

と、そのときだつた。

ケツのポケットで、ケータイが振動した。

家から電話だ。

「もしもし」

「あ、もしもし、お母さんよ！ 何回かけても出なかつたけど、今ど

ここにいるのー××××に行くって言つてたけど、そこにいるの？今  
そこにいるの？」

「どうって、バス停間違えたから今××××にむかって歩いてると  
「」

俺がそつ言つと、母親は  
「ああ……よかつた」

と言つた。

「何？何があったの？」

俺が訊くと、母親はとんでもないことを言つた。

××××で五人、人が殺されたのよ。

あんたの友達の柴崎さんも……刺されたらしくて……。

「……それ、いつ頃のこと?」

「あなたが家出てちょっと五分くらい経つたぐらいのところ……」

俺が家を出て五分後。

俺がバス停にちょうど着いた頃……。

俺は、何も言えなかつた。

後日、柴崎の通夜も葬式も終わつてしまひへ経つたある日のこと。

俺は柴崎の家族に呼ばれて、柴崎の家へ行つた。

そこで、俺は意外なモノを渡された。

「…………これは?」

「あの子の部屋を片付けてたら出てきて……あの子、小田君のこと好きだったみたいね」

「…………」

恋文……じゃ、ないか。

俗に言つて、と書つ書い方も変だが、ラブレター、だつた。

「…………

俺は仏壇に手を合わせ、それから柴崎の家を後にした。

(後書き)

だいぶ久しぶりの投稿です。

どうも、蒼山です。

ジャンルをホラーにするか恋愛にするか迷いました。  
なんかもうテキトーにやつた感バリバリですが、そこは持ち味としてテキトーにスルーして下さい。

こんな何の起伏も無い話を書く（打つ）時すらメタルを聴く俺は正常なのか、否か……。

つてゆーか、最近のアニメはおもしろいね。

メタルもいいけど、アニメもいいね。

でもメタルだな。うん。（結局何が言いたかったのか

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1069e/>

---

エイプリルフール

2010年12月10日22時39分発行